

## 意見

## ことばは何を表示するのか

中 川 純 男

リーゼンフーバー氏の提題がトマスにおけることばとその表示する事物との関係に焦点を当てたものであったのに対し、日下氏の提題はペイコンにおけることばの学、とりわけレトリカの内容を明らかにしようとするものであった。一見すると異なっているかに思える両氏の視点はしかし、シンポジウムの主題である「中世哲学における〈ことば〉」の問題として見るとき、共通の問題提起を含んでいるように思われる。

ことばは事物を表示する。これはことばを考える上での出発点となる基本的な認識であると言ってよいであろう。『命題論』の著者はこの基本的な認識に新たな問題を付け加えた。「ことばは魂における受動のしるしである」と言われている。ことばはどのようにして事物を表示するとともに、「魂における受動」ないし事物についての認識を表示しているのか、この問題に対するトマスの答えは明解である。トマスによれば、魂が事物から受け取る形相は魂がそれによって認識するものであり、認識を完成するのは内的なことばである。したがって内的なことばが表示するのは事物であって、事物についての認識ではない。ここにリーゼンフーバー氏の指摘することばの實在に対する「透明性」が成立する。ただしトマスにおいて内的なことばが透明となるのは、厳密に言うなら、實在に対してではなく實在の本質に対してである。しかもこのような「透明性」を確保するのはアリストテレスの言う「書かれたことば」でもなければ「音声としてのことば」でもない。それはいかなる国の言語でもない「ことば」である。

これに対し日下氏の提題に言うグラマティカ、レトリカが学の素材とするのは「書かれたことば」「音声としてのことば」であって、「内的なことば」ではない。この点で両氏のことばを捉える視点は対照的である。しかしながら、これらの学がペイコンにおいて与えられた役割に注目しなければならない。外国語習得の助けとなるグラマ

ティカは、ことばを単なる音声として見るグラマティカ(Arist. *Met.* Γ, 2, 1003b20-21)ではないであろう。また論理学の実践的部門であるレトリカの議論が「実践的知性を来るべき幸福への信仰と愛に向けて動かす」(*Op. Maius* IV, d. 1, c. 2, p. 100 ed. J. H. Bridges) とされるとき、レトリカの推論を蓋然的であるとしたアリストテレスとは異なった立場からレトリカが評価されていることは確かである。ペイコンはことばの表示機能をアリストテレスのように、いわば垂直的に「魂における受動」そして「事物」を結ぶ一本の線としては考えていないのである。「音声としてのことば」により表示されるものは魂において多様である。ことばは単に事物の認識を表示しているだけではない。このようなことばの理解は当然のことながら、基本的にはアリストテレスの問題意識にそって展開されたトマス論と対照的である。しかしながら、ことばの様々な表示はそのことばの实在を表示する機能から完全に独立しうるのだろうか。实在を表示する機能から切り離されて外国語が習得され、ことばが説得力を持つことは可能なのか。たとえばグラマティカが考察する *consignificatio* あるいは *modus significandi* は、このような呼び名自体、ことばの多様な表示が、实在を表示する機能を基本として考えられていることを告げているのではないか。

ではペイコンがことばの表示機能に多様性を認めることができたのはなぜか。それはペイコンが「ことば」を厳密にその具体性に即して捉えているからではないか。『命題論』に述べられたことばの理解は、ことばをそれが語られた時から切り離し、語る者から切り離し、さらに具体的な言語の持つ多様性をその表示機能によって一つに収束する方向にある。しかしながら「音声としてのことば」はそれを厳密に捉えるなら、ある時誰かが発したことばであり、ある時誰かが聞き取ったことばである。外国語として習得されることばも、一定の文法構造の下に理解されることばも、何らかの心理的効果をもたらすことばも、すべてこのような具体的状況の中で成立していることばである。とすればわれわれはふたたびトマスに目を向けなければならない。トマスが事物から受け取られた形相と内的なことばとを区別したとき、この区別もまたことばを、それを語る者まで視野に含めて把握することにより可能であったと考えられるからである。